

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11960

研究課題名(和文) 看護アセスメント能力の尺度開発

研究課題名(英文) Scale development of the nursing assessment competence

研究代表者

川島 美佐子 (KAWASHIMA, Misako)

足利大学・看護学部・准教授

研究者番号：80412972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、臨床看護師の看護アセスメント能力を自己評価しながら高めることができる看護アセスメント能力尺度を開発することを目的とした研究である。研究の第1段階として、文献レビューにより研究の意義を確認し、概念分析により概念枠組みを明確にした。さらに、臨床看護師へのインタビュー調査から看護アセスメント能力の構成要素を抽出し、9因子31項目からなる尺度原案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護診断サポートシステムは、クリティカルパスや標準看護計画の活用がしやすくなった反面、看護アセスメントが十分に機能しなくても看護過程が展開される現実も否めない。看護過程という思考の道具の良し悪しではなく、実践を軸とする看護においては質の高い創造的な看護実践を成し遂げられるかが重要である。本研究成果は、臨床で繰り広げられる複雑で不確かな流動性のある状況を見極め、査定しながら実践を展開する「能力」についても評価できる尺度を開発のための基礎データとなった。今後、看護実践の質の基準を明らかにする尺度として実践的に活用できるものとして発展させたい。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to develop a nursing assessment competence scale that can enhance the nursing assessment competence of clinical nurses while self-evaluating. As the first step of the research, the significance of the research was confirmed by literature review, and the conceptual framework was clarified by concept analysis. Furthermore, the components of nursing assessment competence were extracted from the interview survey with clinical nurses, and a draft scale consisting of 9 factors and 31 items was prepared.

研究分野：基礎看護学

キーワード：尺度開発 アセスメント 臨床看護師

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

アセスメントという言葉は看護で頻繁に使用しており、広辞苑によれば“評価・査定・見積もり”と意味されている。看護領域におけるアセスメントは、問題解決アプローチによる看護過程の構成要素のひとつとして看護教育・看護実践のなかで広く用いられてきた概念である。“患者を査定する”と表現するよりも、“患者をアセスメントする”と用いた方が看護者にとって、しっくりと定着した外来語といえよう。

看護アセスメント能力を論じる前に看護アセスメントの定義について整理する。アメリカ看護協会は、Standards of Clinical Nursing Practice<sup>1)</sup>の中で、看護実践の範囲と基準の冒頭でアセスメントについて「看護師は、患者の健康あるいは状況に関連する総合的なデータを収集する」と定義している。また、日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会の「看護学を構成する重要な用語集」<sup>2)</sup>によれば、「アセスメントは、看護過程の最初の段階と位置づけられ、情報の収集・分析・集約・解釈のプロセスであり、看護の対象となる人々に最適な看護を提供する上で重要な段階である」としている。さらに看護過程<sup>2)</sup>とは「看護の知識体系と経験に基づいて、人々の健康上の問題を見極め、最適かつ個別的な看護を提供するための組織的・系統的な看護実践の一つ」であり、「対人的援助関係の過程を基盤として、看護の目標を達成するための科学的な問題解決技法を応用した思考の筋道」と述べられている。すなわち、看護領域におけるアセスメントは、看護過程の構成要素と対人的援助関係の思考の筋道という2つの要素を前提とした概念であることがわかる。

看護アセスメントが看護過程の最初の段階として位置づけられているものの、看護過程は看護者が対象となる人々への看護を実践する道具にすぎないという点を強調しておきたい。現代の医療は効率化を推進するために、コンピュータシステムが導入され、看護診断サポートシステムの併用<sup>3)</sup>も行われている。クリティカルパスや標準看護計画の活用がしやすくなった反面、看護アセスメントが十分に機能しなくても看護過程が展開される現実も否めない。看護過程という思考の道具の良し悪しではなく、実践を軸とする看護においては質の高い創造的な看護実践を成し遂げられるかが重要である。「アセスメントには、現象を客観的にとらえる能力、知識や経験を活用しながらその意味・原因を探求する能力・予測する能力、統合する能力などが必要である」<sup>2)</sup>とされ、能力が必要であることが強調されている。したがって、看護アセスメント能力の概念を明らかにすることは、今後の看護教育や看護実践の質の基準を明らかにすることにつながると考える。

## 2. 研究の目的

臨床で繰り広げられる複雑で不確かな流動性のある状況を見きわめ、査定しながら実践を展開する看護アセスメントには、「能力」についても併せて考える必要がある。したがって、臨床看護師の看護アセスメント能力の概念を明らかにし、信頼性・妥当性のある尺度を開発することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 第1段階 : 看護アセスメント能力に関する文献レビューによる概念分析

データ収集は、わが国の臨床において看護アセスメント能力という概念がどのように認識され、活用されているかを分析するため和文献のみを対象とした。検索ツールは、「医学中央雑誌Web」を活用し文献48件を分析対象とした。分析方法は、Rodgers 概念分析アプローチ法を用いた。概念は開発されるものであり、時代、社会において、用いる者・場所・状況によって常に差異・変化・拡大し、時間の経過のなかで使われ、適用され、再評価され、洗練される。さらに経験に適応でき得る「本当の (real)」定義に言及するという Rodgers 法の特徴が、本研究でとりあつかう概念に適していると考え採用した。対象となる文献を精読し、属性、先行要件、帰結、

関連概念の意味内容をコーディングシートにまとめ、それぞれを抽出した。抽出した内容は3名の研究者が独立して確認し、妥当性の担保に努めた。

#### (2) 第2段階 : 臨床看護師へのインタビュー調査

臨床実践における看護師の看護アセスメント能力とは何かを問い、その能力に内包する臨床看護師の認識と行動を明らかにすることを目的とした。研究参加者は研究協力を得られた4施設の看護部長あるいはそれに準ずる職にある管理者に目的を説明し選出を依頼した。選定条件看護管理者を除く中堅レベル以上の看護師、経験領域は限定せず病棟に勤務している者、研究参加者としての同意の得られた者とした。面接方法はガイドを用いた半構造化面接法を行い、ベレルソンの内容分析法を用いた。看護師が語った看護アセスメント能力に関する意味内容の類似性に基づきサブカテゴリ化抽象度を高めカテゴリ化した。妥当性・信頼性の確保のためスーパーバイズを受けた。さらに臨床経験をもつ看護教育者3名によるサブカテゴリ一致率をスコットの式に基づき算出した。

#### 4. 研究成果

以下、【】はカテゴリ名、《》はサブカテゴリ名とした。

##### (1) 第1段階

概念分析の結果から、5つの属性、1つの先行要件、2つの帰結が抽出された。属性は、以下の通りである。【プロセスのなかで検証していく力がある】このカテゴリは《時間的経過を視野にいった知的作業》《実践のプロセスに則した知的作業》といったプロセスにおける看護師の看護実践と同時に行われる認識を表していた。【情報を系統的・継続的・効果的に収集する力がある】このカテゴリは、《必要な基礎情報を収集する》《情報を包括的に収集する》《必要情報を継続的に収集する》《目的意識をもって情報を収集する》《情報を得るために患者と向き合う》《患者の変化に気づく》など、情報収集の内容と方法を表していた。【有効な情報かどうかの確認を繰り返しながら見きわめる力がある】このカテゴリは、《問題となる情報を確認する》《情報の不足はないか確認する》《矛盾するデータの意味を探る》《情報を取捨選択する》といった患者にとって有効な情報かどうかを吟味し、見きわめるといった看護師の認識と行動を表していた。【手がかり情報を特定し、推論する力がある】このカテゴリは、《手がかり情報を俯瞰する》《手がかりを特定し焦点化する》といった手がかりとなる情報を特定するために、知識や患者の思い、強みを強調し、次のケアにつなげていく看護師の認識を表していた。【推論したことを表現する力がある】このカテゴリは、《看護の大まかな方向性を表現する》《同僚やチームと討議する》といった推論したことを言語化し、記録する、同僚と討議するといった看護師の行動を表していた。

属性、先行要件、帰結に関するカテゴリとサブカテゴリを構造化し概念図を作成した。属性は、【情報を系統的・継続的・効果的に収集する力がある】といった情報収集と分析に関するものと、【推論したことを表現する力がある】といった行動も含まれた。これらの構成要素は、単体では有機的に機能しない。そのため、情報収集と分析する力と表現する力が、行きつ戻りつするための基盤となるのが、【プロセスの中で検証していく力】である。この属性は、属性のなかでも本概念の土台として位置づけた。これらの構成要素の間で、行きつ戻りつするアセスメントの連鎖を半円形の矢印で表現した。

看護アセスメント能力の概念を「専門的知識や過去の経験を有効活用しながら、対象の情報をプロセスのなかで繰り返し、収集し、見きわめ、推論したことを表現する能力である」と定義した。看護アセスメント能力の特徴には、【看護師の豊富な知識と意味のある経験】という素養を發揮し、【情報を系統的・継続的・効果的に収集する力がある】、【有効な情報かどうかの確認を繰り返しながらみきわめる力がある】、【手がかり情報を特定し、推論する力がある】といった看

護者の認識と【推論したことを表現する力がある】といった行動を内包する特徴がある。対象の生命に直結する危険や異常,体験している苦痛や困難,その人らしい生活を保障できているかという視点で,実践の【プロセスの中で検証していく力がある】という知的作業の連鎖が繰り広げられる。提示したモデルケースによる看護者の語りからは,事前に把握した気がかりな情報を患者のベッドサイドで,患者に問いかけながら確認を繰り返し,患者の平時の状態を頭に描き見比べ,重要か重要でないかを判断していた。加えて看護者は,同僚に判断したことを言語化して共有していた。注目すべきは 対人援助関係の過程を基盤とした看護アセスメント能力を活かし,情報を取捨選択していたといえよう。看護アセスメント能力には,看護者が目の前にいる患者に熱意をもって主体的に情報を得るために,患者に向き合い,患者の認識や期待といった反応を確認する実践と知的作業の連鎖が必要であると考えられる。

## (2) 第2段階

研究参加者は,総合病院に勤務する病棟看護師10名(男性1名含む)で,平均年齢は44.5歳であった。臨床経験は多岐にわたっていた。インタビューガイドに基づき半構造化面接を実施した。研究対象データは,逐語録をコード化した記録単位は297であった。意味内容が不明なものを除外し272記録単位を分析対象とした。

【実践的で効果的な情報収集をする力】40記録単位(14.7%),【情報を裏づけるために確認を繰り返す力】37記録単位(13.6%),【専門的な知識を活かす力】20記録単位(7.4%),【収集した情報を吟味する力】69記録単位(25.4%),【積み重ねた経験を活かす力】30記録単位(11.1%),【考えや判断を表現する力】10記録単位(3.7%),【考えに基づいた実践を意図する力】33記録単位(12.1%),【実践を振り返る力】9記録単位(3.3%),【他者に意見を求め検討する力】24記録単位(8.8%)であった。スコットの式にしたがい,272記録単位と31のサブカテゴリの一致率は,76%,78%,89%であった。看護アセスメント能力には,《情報収集は主観的情報と客観的情報を比較する》や《主観的情報とそれに関連した客観的情報が相反するとき、なぜギャップがあるかを考える》といった看護師の認識とその情報の確証を得るために《気がかりに思ったことは、再度患者に問いかけ、患者の反応を注視する》や《足りない情報は何かを考え、さらに踏み込んで、多角的に収集する》といった行動を瞬時に交差させながら繰り広げられることを確認した。

臨床看護師が日々の看護実践のなかで繰り広げられるアセスメント能力は、看護師の認識としては【専門的な知識を活かす力】【収集した情報を吟味する力】【積み重ねた経験を活かす力】【考えに基づいた実践を意図する力】【実践を振り返る力】、看護師の行動としては【実践的で効果的な情報収集をする力】【考えや判断を表現する力】【他者に意見を求め検討する力】看護師の認識と行動の両方が存在した【情報を裏づけるために確認を繰り返す力】であった。対人援助関係の過程を基盤とした能力を活かし,情報を取捨選択していた。以上の結果から9因子31項目からなる尺度原案を作成した。カテゴリ一致率から,本研究において信頼性を確認し,看護師が実践のなかで看護アセスメント能力を自ら高めるための指標となる可能性が示唆された。

## (3) 今後の展望

本研究成果は,臨床で繰り広げられる複雑で不確かな流動性のある状況を見極め,査定しながら実践を展開する臨床看護師が自己評価できる,あるいは看護教育・臨床実践の基準となる基礎データとなった。今後,看護実践の質の基準を明らかにする尺度として,探索的因子分析に向けて調査を継続していく準備を進めており,本研究の結果を国内外の専門誌や学会等で発表する予定である。

#### 引用文献

- 1)日本看護協会:アメリカ看護師協会「看護実践の範囲と基準」全訳,インターナショナルレビュー, 29(3):21-27,2006
- 2)日本看護科学学会看護学術用語検討委員会:看護学を構成する重要な用語集,2011
- 3)内田雅子,小長谷百絵,木下幸代,森田夏実,段ノ上秀雄,黒江ゆり子:事例を用いた看護師育成の組織的な方策の意義,高知県立大学紀要 看護学部編,67:1-17,2017

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川島美佐子, 岡美智代, 上星浩子	4. 巻 35
2. 論文標題 看護アセスメント能力の概念分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 30-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Misako Kawashima, Michiyo Oka, Hiroko Jyoboshi
2. 発表標題 Concept Analysis of “Nursing Assessment Ability” in Japan
3. 学会等名 2nd World Congress on Nursing & Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川島美佐子, 上星浩子, 岡美智代
2. 発表標題 臨床看護師の看護アセスメント能力に関する認識と行動
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡 美智代  (OKA Michiyo)  (10312729)	群馬大学・大学院保健学研究科・教授    (12301)	

